

郷土資料館だより

Vol.38 No.3

2016.3.15

企画展「絵はがきでみる三島」報告

- 開催期間 平成27年10月10日(土)～12月13日(日) ●入場者数 16,435人
●会場 郷土資料館1階企画展示室 ●展示資料数 114点

楽寿園の菊まつり開催期間に合わせ、なつかしい三島を絵はがきで紹介する企画展を開催しました。日本で絵はがきが登場した明治後期以降、名所や風景、行事や出来事、街の様子、災害や事故など、さまざまな事象が写真で記録された絵はがきは、当時の社会を今に伝える記録でもあります。本展では歴史資料としての絵はがきを通じて戦前の三島を振り返る内容とし、館蔵品のほか市内在住の郷土史家関守敏氏のコレクションなども加えて、富士山と三島、街のにぎわい、記念絵はがき、災害を伝える絵はがきなどテーマごとに展示しました。ご年配の方にはなつかしく、若いファミリー層には初めて知るかつての三島の様子が興味深かったようで、来てよかった、という嬉しい声もいただきました。



関連事業

◆講演会「絵はがきと写真でみるふるさと三島」 10月31日(土)13:30～15:30 参加人数52人

郷土史家の関守敏氏を講師に迎え、氏が蒐集した約800点の古写真・絵はがきから選んだ資料をもとに、三嶋大社、桜川周辺、交通などのテーマごとに街並みや風景の変遷について写真や絵はがきの年代推定のヒントなど、長年の郷土史研究による豊富な知識をお話いただきました。講師、聴衆がともになつかしの三島を追体験する一体感のある講演会となり、第二弾を望む声があがるなど好評を得ました。

◆「展示解説」 11月13日(金)／11月21日(土) 14:00～(30分程度) 参加人数計21人

企画展「三島宿と三嶋暦」開催のお知らせ

- 開催期間 平成28年4月28日(木)～7月3日(日)

慶長6年(1601)、徳川家康は東海道に宿場町を指定し、宿駅制度を整備しました。三島宿もこの時に宿場町として指定されています。以後、三島宿は箱根八里の難所を控えた宿場町として多くの旅人でにぎわいました。また、幕府の厚い保護を受けた三嶋大社やそこで頒布される三嶋暦、頭上を用水が流れる千貫樋などの名所・名物も旅人の関心を引きました。

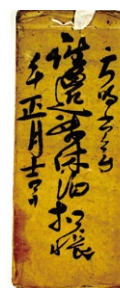
今回の企画展では、千貫樋・御殿地・三嶋大社・湧水河川と橋などの三島宿の風景や本陣・旅籠(はたご)を利用した旅人の様子、土産物として有名な「三嶋暦」を主に取り上げて紹介します。

●主な展示品

- ・三島宿の浮世絵(歌川広重「朝霧」ほか)
- ・三島宿街道絵図、三島宿軒並絵図、御殿地絵図
- ・北斎為一『道中画譜』
- ・樋口本陣家文書・本陣関札(写真②・③)
- ・問屋場・町役場文書
- ・三嶋暦(写真①)、地方暦(伊勢暦ほか)



写真①



写真②



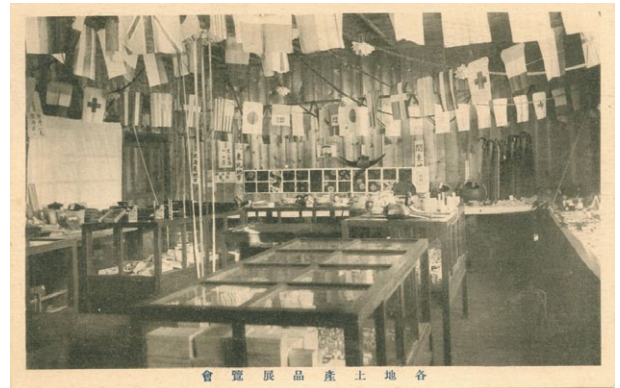
写真③



資料紹介：学校生活を伝える絵はがき—三島商業学校—



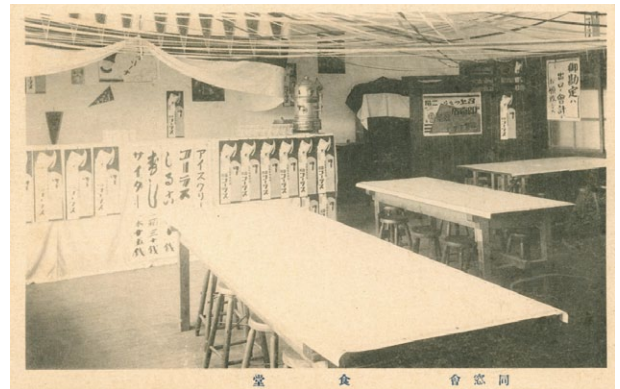
正門



各地土産品展覧会



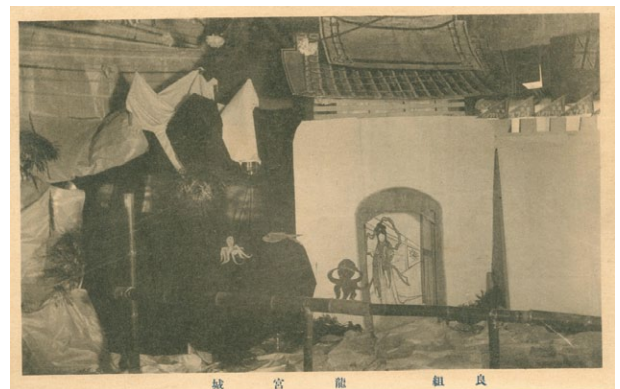
智組 ポスター展



同窓会 食堂



同窓会バザー



良組 龍宮城

万国旗がはためき、何やら楽しげに飾られた校内の写真。これは町立三島商業学校の創立10周年記念祭の様子を記録した絵はがき(15枚組のうち6点)です。食堂には現在も販売中の森永コーラスの広告や「召上ったら二階の即売店展覧会ヲ御覧下サイ」の文字が見えます。龍宮城を模したジオラマやポスター展などクラスごとに趣向を凝らした催し物から、今も昔も変わらぬ学園祭のお祭り気分が伝わってくるようです。

三島商業学校は大正8年(1919)に創立され、創立10周年の昭和4年(1929)当時は下田街道沿いの才塚(現在の南二日町グラウンド)にありました。同校はその後校名の変更や合併、県立移管などを経て昭和24年に現在の三島南高等学校になり、平成13年(2001)現在の所在地である大場に移転しました。

宗閑寺の本尊とその由緒

三島市山中新田の山中城三ノ丸跡には、江戸時代に創建された宗閑寺というお寺があります。宗閑寺は山号を東月山とし、静岡市葵区にある華陽院というお寺を本寺とする浄土宗寺院で、境内には天正18年(1590)3月29日の山中城の戦いで戦死した北条方の副将間宮康俊らの墓があることで知られています。今回はその宗閑寺について、特にご本尊の由緒にスポットをあてて紹介します。

宗閑寺の由緒について記された資料はいくつか伝来していますが、資料の成立年が明らかで、もっとも古いものは、東京の増上寺に伝わる『浄土宗寺院由緒書』になります。同資料は元禄8・9年(1695-96)頃、幕府により全国の浄土宗寺院の開山の由緒・来歴の調査が行われた際に増上寺へ提出されたもので、巻23「相州豆州寺院由緒記」中に宗閑寺の由緒が「宗閑寺 駿府華陽院末」として収められています。

そこには間宮康俊の女の於久の方が、父康俊の討死後、徳川家康の近習として奉仕したとあり、父の菩提を弔うことを家康に願い出て許可され、桑譽了的(?-1630)を開山僧として建立に至ったと記されています。また同寺の本尊について、聖徳太子が作られたもので、もと信州善光寺の前立阿弥陀如来像であったが、家康が善光寺に参詣した際、所望して持ち帰り、持仏堂に安置、それを於久の方が拝領してこの寺に納めるに至ったと記されます(なお、当地の地誌である『豆州志稿』『増訂豆州志稿』『三島市誌』は、同寺の創建について、於久の方没後であるという説を採用しています)。

善光寺のご本尊である阿弥陀三尊像は、拝観することのできない絶対秘仏として知られています。「前立阿弥陀像」というのは、そのご本尊の模鑄像で、同じく善光寺に伝来しており、ご本尊の御身代わりとして7年に一度催されるご開帳の儀で拝観することができます。この善光寺の阿弥陀像について、中世以来、数多くの模像が作成され、全国的に広まりました。一光三尊形式で、中尊の阿弥陀如来は施無畏印(右手)・刀印(左手)を結び、脇侍の観音・勢至両菩薩は梵筐印を結ぶ等といった特徴を備えており、それらは「善光寺式阿弥陀像」と総称されています。宗閑寺のご本尊も、恐らくはこの善光寺式阿弥陀像の一つとして作成されたのであり、上記のような特徴を備えていたのではないのでしょうか。また善光寺信仰は、中世以来、聖徳太子信仰と結びついて展開したため、由緒書に「聖徳太子が作られたもの」という記述が加えられたのだらうと考えられます。「家康が善光寺参詣の際に所望して持ち帰った」という記述も、弘治元年(1555)武田信玄によって善光寺のご本尊が信濃の地を離れ、さらに織田信長、徳川家康、豊臣秀吉といった戦国武将らにそれぞれ迎え入れられて各地を流転し、約40年の時を経た慶長3年(1598)にようやく善光寺に戻されるに至った、という経緯がもととなって由緒書中に取り込まれたものだらうと推測されます。

現在の宗閑寺のご本尊は創建当初のものではなく、善光寺式阿弥陀像のもつ特徴は見られません。時代の変化とともに、ご本尊に求められる祈りの形も変化していったのでしょう。



【写真1】宗閑寺の本堂



【写真2】現在のご本尊

三島宿街道絵図からわかる江戸時代の三島宿と宿内の橋

112号で取上げた「三島宿街道絵図」について、今回はもうすこし詳しく紹介します。この絵図はタテ42cm×ヨコ133cm、作成は幕末・維新頃と推測されます。

東の見付と広小路あたりに門と柵が描かれているのが特徴的です。また陣屋の記載がなく、境川が新宿ではなく伏見村との境と記されています。

江戸時代の三島宿の橋

三島宿には小浜池などを水源とする湧水河川などに架かる橋が多数ありましたが資料により多少の異同があります。

下の表は各資料に記載された宿内の橋(新町橋含む)の状況をまとめたものです。

橋の名称	種別	絵図 A	絵図 B	分間延絵図	豆州志稿	宿之古記録
①新町橋	板橋	○	○	○	○	○
②(大社前の土橋)	土橋	○	×	○	×	×
③久保町橋(祓所橋)	石橋	○	○	○	○	○
④問屋前橋	石橋	○	○	○	○	○
⑤御殿橋	石橋	○	○	○	○	○
⑥中ノ橋	石橋	○	○	○	○	○
⑦四ノ宮橋	石橋	○	○	○	○	○
⑧源兵衛橋	石橋	○	○	○	○	○
⑨花掛橋	石橋	○	○	○	○	○
⑩茶町橋	石橋	○	○	○	○	○
⑪木町橋	石橋	○	○	○	○	○
⑫(茅町の石橋)	石橋	×	○	○	×	○
⑬夫婦橋(二枚橋) 1	石橋	○	○	○	○	○
⑭夫婦橋(二枚橋) 2	石橋	○	○	○	○	○

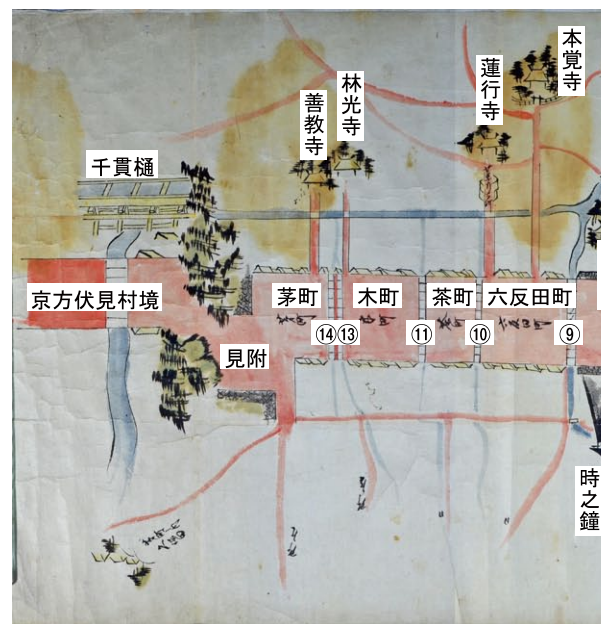
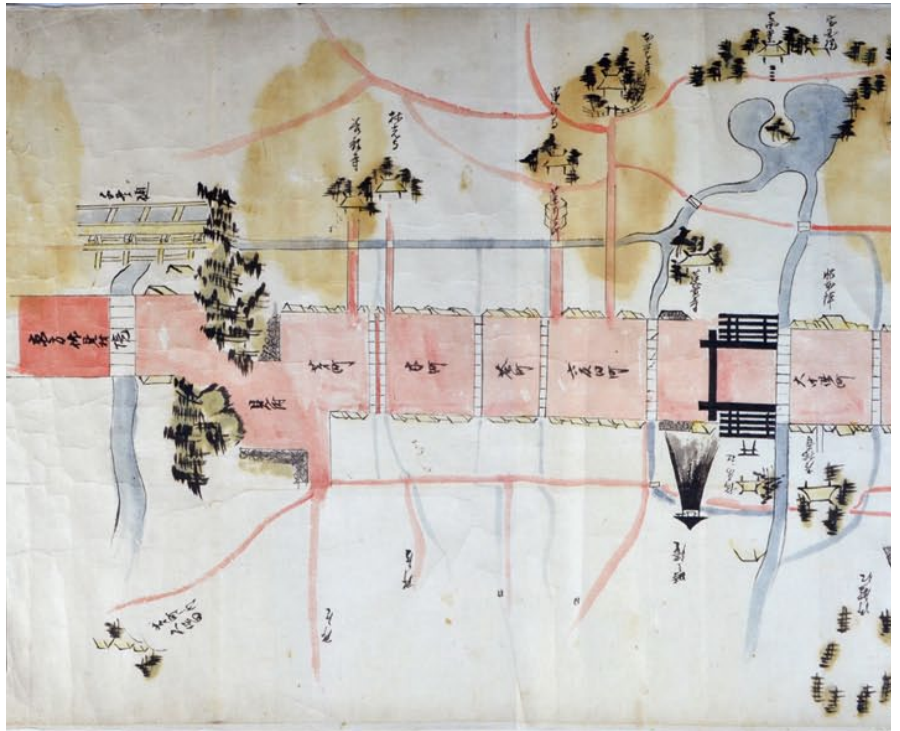
橋の番号は絵図に書き込まれた番号と一致する。

○:記載あり、×:記載なし

絵図A:今回紹介した絵図 絵図B:郷土資料館所蔵の別の街道絵図
分間延絵図:『東海道分間延絵図』(文化3年(1806)、東京国立博物館蔵)

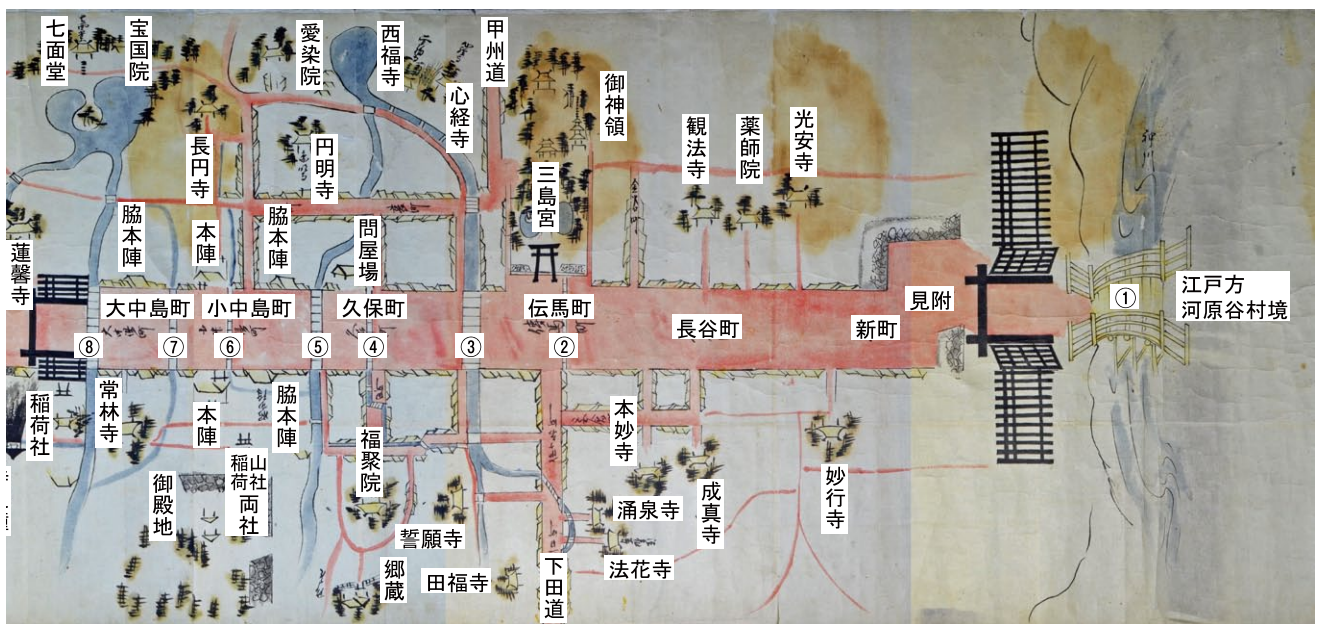
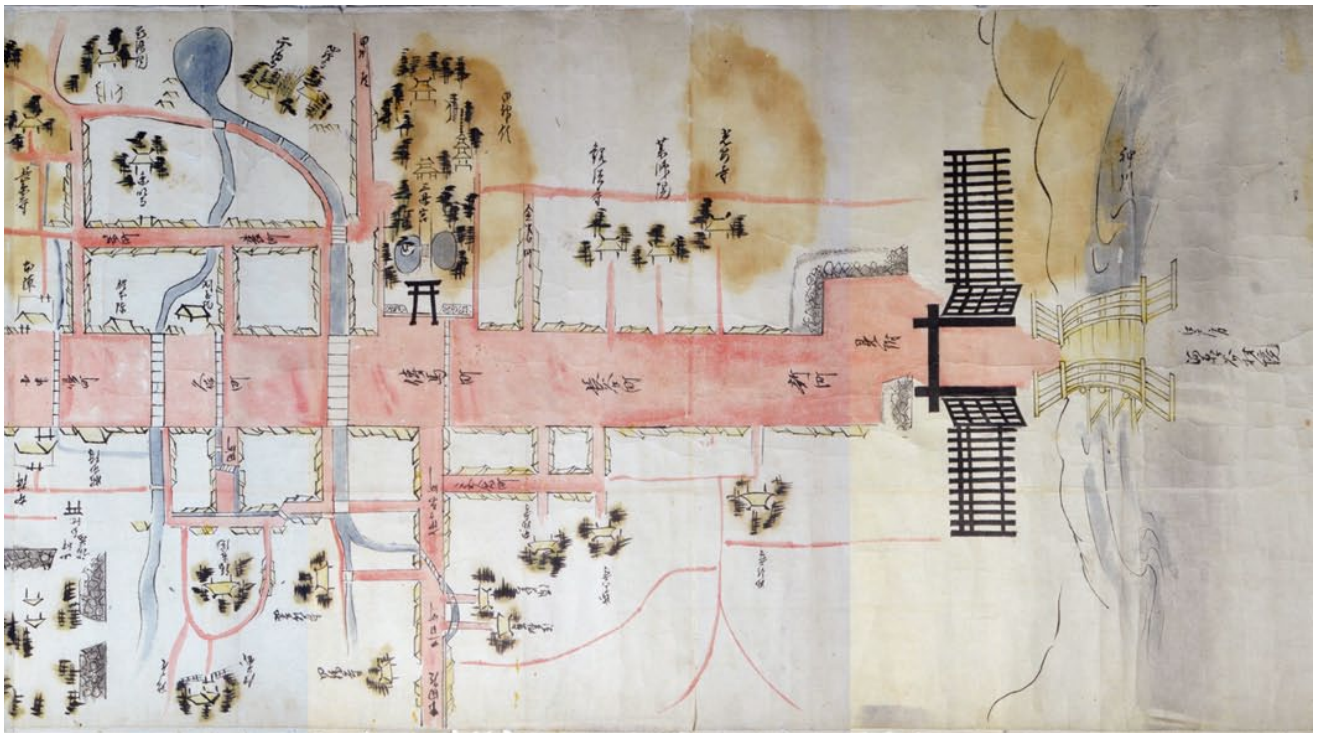
豆州志稿:『豆州志稿』(秋山富南、寛政12年(1800))

宿之古記録:『自永正至天明 三島宿の古記録(解説書)』(土屋壽山編)



表より、江戸時代には板橋(新町橋)1本、土橋(大社前)1本、石橋12本の橋があったと言えそうです。新町橋は見付の外側ですが、多くの資料で三島宿の橋として扱われています。

『三島宿の古記録』(p191~)や『三島市誌』(中巻 p 383~)によると、12本の



石橋は寛文8年(1668)に架けられました。石橋の横幅は3~4.5間(5.4~8.1m)となっているので、宿内の東海道の道幅もこの程度だったのではないかと想像されます。新町橋は元禄16年(1703)または正徳5年(1715)に板橋の架け替えがありました。それ以前の状態についても、川幅から考えて板橋だったのではないでしょ

うか。その後、元文2年(1737)に土橋に替わり、安永7年(1778)にまた板橋に戻っています。その後の絵図や記録はどれも板橋となっています。また、嘉永7年(安政元年、1854)の安政の東海地震で大破(『研究報告7』p30)、安政3年の水害で流出(『三島市誌』下巻p815)しています。

三島の歴史とジオポイント・6

—新谷稲荷神社と小室石製石燈籠—

三島市新谷塚ノ越158に鎮座する稲荷神社は農業の神様「稲倉魂命(ウカノミタマノミコト)」を祀ります。社伝によると元禄16年(1703)に山城国嵐山稲荷神社を勧請し、宝暦12年(1762)に正一位をいただきました。

旧新谷村は新屋村とも書かれ、青木村の一部でしたが江戸時代に分村したようです。もともと幕府の直轄領(天領)でしたが、元禄11年(1698)の「じかたなおし地方直」(500俵以上の蔵米取の旗本に同等の知行地を与え直接収税させる)により、旗本の土岐氏と進氏の共同支配地となりました。これに伴い青木村の分村的性格を一掃するためにも、新しい村の鎮守として稲荷神社が勧進されたと考えられます。

本神社の境内は狭く、周囲より一段高くなっています。これは神社の脇を南流する中郷用水の中心水路である大溝川(御園掘)の「砂あげ場」(昔から用水路のしゅんせつ浚渫はたびたび行われ、用水路の脇には「砂あげ場」が各所に設けられていました)の跡地を利用したためです。

鳥居の内側には一対の石燈籠があります。向かって右側の燈籠の石材は市内の古い石燈籠に比べると色調が派手です。これは「小室石」(伊豆の国市・小室の石切り場産。ケイ酸分の多い安山岩(デイサイト)質の火山れきぎょうかいがん礫凝灰岩 = 数百万年以上前、伊豆半島が南海の火山島群だった頃、噴火で海底に堆積した火山灰や派手な色合いの火山礫と一緒に固まったもの)で作られているからです。小室石製の石燈籠は市内にはこの一基しかなく非常に珍しいです。しかし、石材の産地に近い大仁(吉田神社)・修善寺(修禪寺)方面ではよく見かけます。竿には「献燈」「昭和45年10月」「伊東正作」と彫られています。昭和45年(1970)に伊東氏が奉納したものです。

向かって左側の燈籠の竿には「献燈」「明治3年9月」「風間□□」と彫られていることから、明治3年(1870)に風間氏が奉納したものです。石材は、火袋以外は全て現在の伊豆の国市・北江間地区から産出した「江間石」(長岡凝灰岩上部層・数百万年前、伊豆半島が南海の火山島群だった頃、噴火で海底に堆積した火山灰が固結したもの)で作られており、市内の古い大半の石燈籠と同質です。しかし、笠は破損し火袋は「小室石」で作りなおされています。たぶん昭和5年(1930)の北伊豆地震の強震で倒れ火袋は粉碎したので昭和45年に新しい燈籠が奉納されたとき、同質の石材で作直したのでしょう。

本殿の左側には「嚴魂(イツタマ)神社」が祀られています。本来の嚴魂神社は「金刀比羅宮」を祀るものですが、当地では先の大戦で戦死した新谷出身の12柱を祀っています。昭和26年(1951)に竣工し遷宮祭が執り行われました。石燈籠の隣には水の神である「弁財尊王(寛政2年・1790)」の石碑が置かれています。また、稲荷神社の北側には祭神不明の山神社(農業用水源の守り神)が鎮座しています。稲荷神社とその周辺は、新谷地区の人々が毎年の豊作と村内安全を祈念する神聖な場所です。(郷土資料館運営委員・増島淳)



新谷稲荷神社の全景



小室石製燈籠の竿

郷土教室・体験イベントの報告

郷土資料館では、楽しみながら学べる体験イベントをボランティアさんと一緒に開催しています。平成27年11月から平成28年2月までに行った事業をご紹介します。

日程	郷土教室	内容	参加者
11月28日(土)	たてばんこ 立版古をつくろう	立体的な浮世絵「立版古」をつくった。また、3階の宿場コーナーの展示解説を行った。	7人
12月5日(土)	ワラ細工をつくろう	ワラをなつて正月飾りを作った。	48人
13日(日)	昔のあそび	メンコ作り、割りばしでっぼう作り、こま・けん玉遊びを行った。	6人
1月17日(日)	リリアンあみでサルをつくろう	ペットボトルを再利用したリリアンあみの器具で干支の「サル」を作った。事前申込制。	15人
23日(土)	旅人装束を着てみよう	旅人装束を着る体験をした。また、3階の宿場コーナーの展示解説を行った。	20人
30日(土)	桿ばかりづくり	桿ばかりを作る体験とその使用方法を学び自分のつくったばかりの精度を確かめた。事前申込制。	3人
2月6日(土)	昔のどうぐ	鯉節けずり、足踏み式ミシン、石臼、和菓子の型を使った型抜きを行った。	51人



ワラ細工をつくろう



リリアンあみでサルをつくろう



昔のどうぐ

平成28年度も5月から様々な郷土教室を開催いたしますのでお気軽にご参加ください。

予告 !! 郷土資料館ボランティア養成講座

期 間 平成28年6月～29年2月

内 容 ①三島や伊豆地域の歴史・民俗・文化・自然に関する講座

②古文書などの歴史資料の調べ方・整理の仕方

③地域の史跡・石造物・寺社などの調べ方 など

講座終了後、希望の方は郷土資料館と一緒に体験イベントの実施や地域の文化財(古文書や石造物など)の調査・整理などの活動が行えます。興味のある方はお問い合わせください。

寄贈・購入資料の紹介

平成27年12月から平成28年1月までに、次の方々から寄贈のご協力をいただきました。ありがとうございました。（寄贈者の方の希望により個人名・団体名を伏せて表記しております。）

寄贈者	資料名	点数
個人（三島市）	近世古書類、民具、複製三四呂人形、絵葉書、古写真、地図、和暦表ほか	157点
個人（清水町）	高梨勝瀨画「信州八ヶ岳」	1点
団体（三島市）	写真スライド、アルバム、おもちゃ、浮世絵（コピー）一式	6点
個人（三島市）	絵葉書（沼津三島館）	1点
個人（三島市）	写真（明治後期～大正か）	1点

捨てちゃおうか…のその前に。それ、「文化財」かもしれません！

郷土資料館では、郷土の歴史・文化・生活に関する資料の収集に努めています。例えば三島の古い広告、チラシ、ポスター、絵葉書、写真など、意外なものが貴重な郷土資料になることもあります。古いものを処分する前に、ぜひ郷土資料館までご一報ください。拝見の上、寄贈をお願いすることがあります。

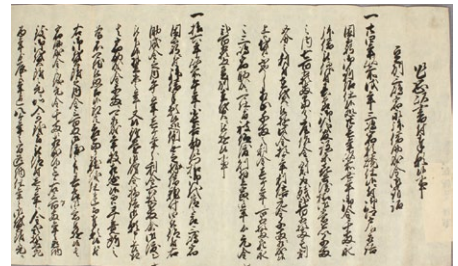
刊行図書のご案内

「三島宿関係史料集7（三島 問屋場・町役場文書）」

平成28年2月26日刊行（頒布価格未定）

当館所蔵の問屋場・町役場文書の中から、助郷や宿場運営に関する史料を中心とした古文書の翻刻を収録した史料集です。当時の宿場運営における金銭面や助郷の運用などが記された、近世交通史・地域史の研究に役立つ一冊です。

右：「乍恐以書付奉願上候事(豆州三嶋宿永拝借助成金御訴訟)」(享保2年)冒頭部分



「三島市郷土資料館研究報告8」 平成28年3月31日刊行予定（頒布価格未定）

三島、伊豆の近世～近代史、近年注目が集まる三島の地質についての考察など、わたしたちの郷土三島をより深く知ることのできる一冊です。

【内容】

- 「伊豆国生産会社の設立の経緯について—明治初期における地方の勸業政策—」
- 「宗閑寺の創建と江戸時代後期の寺内整備に関する覚書 附宗閑寺関係資料」
- 「『官軍御用日記』(慶応四年二月～明治二年二月迄)翻刻—三島宿維新騒動の記録—」
- 「三島市郷土資料館所蔵 三島関連絵葉書目録(戦前)」
- 「文化年間前半における三島宿拝借金の累積について」
- 「三島市街地と御殿場泥流起源の巨石」

桜井祥行
柿島綾子
大川裕代
笹山曜子
平林研治
増島 淳

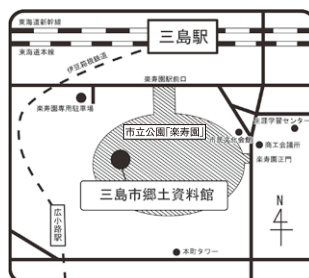
郷土資料館のご案内

〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL 055-971-8228 FAX 055-971-6045

開館時間 午前9時～午後4時30分(11月～3月)
午前9時～午後5時(4月～10月)

休館日 毎週月曜日(祝日のときは翌平日)、
年末年始

入館料 無料(ただし楽寿園入園料として別途
300円がかかります。15歳未満は無料、
学生は学生証提示にて無料。)



三島駅(南口)から徒歩5分。

郷土資料館だより

Vol.38 No.3(第114号)

発行日 平成28年3月15日(年3回発行)

編集 三島市郷土資料館

発行 三島市教育委員会

E-mail : kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp

URL : <http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>